

# 社会科

## 1 研究テーマについて

### 社会的思考力・判断力を育成する支援のあり方 ～社会科における学習意欲と基礎・基本に視点を当てながら～

社会科のねらいは「公民的資質の基礎を養うこと」である。「公民」という言葉のとらえは、非常に難しいが、あえて分かりやすく考えると「民主主義の社会に生きていることを自覚し、その社会を認識できる人」と言えるであろう。北俊夫氏(岐阜大学教授)は、「公民的資質の基礎」を身につけていくために、社会科に求められている学力を次の4点に整理している。

- 社会生活を営んでいくうえで必要な知識を理解すること(理解力)
- 社会的事象に対して、多面的にとらえ、公正に考え、判断すること  
(社会的な思考力・判断力)
- 資料を効果的に活用して問題を解決したり、調べたり考えたりしたことを表現すること  
(調べる力、表現力)
- 社会科の授業に意欲的に取り組み、学習して学んだことをその後の学習や生活に生かすこと  
(社会的実践力)

現代社会は高度に発達しているため社会全てを認識することは不可能だが、自分の生活に必要な社会の有り様を認識する力は不可欠である。そのとき最終的に必要なのが社会的思考力・判断力ではないかと考えた。では、この社会的思考力・判断力を社会科の授業の中でどのように育てたらよいかということを考えていく。

社会的思考力とは、「事実即して、多面的に社会事象について思考する力」と考えている。ある社会事象を、客観的な資料等にもとづいて多面的に見ていく力である。例えばスーパーマーケットを取り上げる授業では、「消費者のニーズにあった品揃えや配置・価格を考え、商品を販売している。」という事実を聞き取りなどの活動を通して資料化し、分析していく。具体的な場面での学習活動を通して社会事象を読み取っていくのである。

社会的判断力とは、事実即して読み取って社会事象に価値づけをしていく作業である。現在、または過去の社会事象に対して、どういう意味があるのか価値づけをするのが社会的判断力である。ただ、価値づけをするには、個々の価値観が大きく関わってくる。そこで大切なのは、個人レベルでの価値づけではなく、社会レベルでの価値づけでなければならないということである。したがって、価値づけの理由には一貫性が求められる。例えば、「生ごみは燃やすのがよいか、堆肥にするのがよいか。」という問題に価値判断を下す。思いつきではなく客観的な理由づけをもとに判断ができる、これが社会的判断力であると考えられる。

こうした考えを前提にして、これらの力を育てるには、どんな支援が有効なのかということを考えていきたい。社会的思考力・判断力を育てるためには、その土台として学ぶ意欲と、社会科の基

礎・基本の習得が不可欠である。そこで、社会科としての学習意欲と基礎・基本に視点を当てて、その延長線上にある社会的思考力・判断力を育てる支援のあり方について考えていくこととする。

## 2 本校の研究主題との関わり

本校社会科では、研究主題(「学ぶ意欲を高め、実践的な行動力をもった児童・生徒の育成~かわり合う力、適切に判断する力、自分を生かす力を培う小中一貫教育の在り方~」)の中でも「実践的な行動力をもった児童・生徒の育成」を目標に取り組んでいる。すなわち、小・中9年間(小学校1・2年を除けば7年間)の社会科の学習を通じて、「『基礎・基本に支えられた知識や理解を生かし、自分を生かすために、自然・社会・人に積極的に働きかけようとする行動力』つまり、『学んだことを自分の生活に生かす力(生きてはたらく力)』」(別綴「研究の概要」より引用)の育成を目指して授業づくりに努めている。

しかし、この「実践的な行動力」は、単発の授業の中で一朝一夕に身につくものでなく、学習の積み重ねによって育成されていくものである。その学習の積み重ねが可能となる前提には、当然、「学ぶ意欲」の高まりと継続が必要となる。本校の研究では、「学ぶ意欲」について次のように述べられている。「『授業(学習)』における『活動』の中で生まれ、育てられるのもである。…略…子どもたちの『知的好奇心』『有能さへの欲求』を満たす『活動』を設定し、展開することで『学ぶ意欲』の高まりを生み出していく。」(別綴「研究の概要」より引用)

社会科の学習においてもこの仮説のもと、「学ぶ意欲」を高めるためにいくつかの手だてを考えていく。

## 3 社会科における「学ぶ意欲」について

桜井茂男(筑波大学助教授)は「自ら学ぶ意欲」の発現プロセスは、次の2種類があるとしている。

ア「おもしろいから自ら学ぶ意欲」…「おもしろい」という理由で自ら学ぶ意欲のことで、学ぶことそれ自体が目的や目標になっている意欲。

イ「自己実現のために自ら学ぶ意欲」…自分のもっている潜在的な能力を十分に発揮して、自分らしい人生を歩もうとする意欲。

アを「興味的な理由による学ぶ意欲」、イを「自己目標を実現するための学ぶ意欲」とする。アはイの基礎になるものである。社会科が始まる小学校中学年から高学年にかけて、イの比重が相対的に強くなる。中学校においてその傾向はより顕著になる。したがって社会科では、イの「自己実現のために自ら学ぶ意欲」の獲得を目指して、実践を進めていくこととする。

では、社会科でいうところの学習意欲の具体的な児童の様相を挙げてみる。

- ・意欲をもって社会科の学習にのぞむ。
- ・進んで問題を見つけようとする。
- ・問題に向かって進んで追究する。
- ・時間外でも進んで調べ活動をする。
- ・新聞やニュースなどに興味をもち、問題解決への資料とする。

- ・社会事象に対し疑問を持つ。
- ・社会事象に対し自分で追究する。

児童生徒の発達段階によって違いはあるが、こうした様相から学習意欲が育っているか見取ることができる。

次に、こうした意欲を育てるための手立てを考えてみたい。

- ・意欲をもてる学習内容（教材内容）の開発
- ・意欲を喚起する発問の工夫
- ・意欲をもてる学習方法の工夫

子どもたちが意欲をもつためには、興味深い学習内容を取り上げることが重要である。例えば3年生の「工場の仕事」であれば、鳥取の食卓に頻繁に登場するものの、原材料や作り方があまり子どもたちには知られていないちくわの製造を取り上げることで「もっと知りたい、もっと調べたい」という意欲が高まるであろう。追求する価値やおもしろさ、切迫感がある教材の吟味ももちろん大切である。

同じ学習内容によっても、問い方によって子どもたちの意欲の高まりや思考の深まりは変わってくる。例えば、梨農家の工夫を考えさせるとき「梨を作っている人はどんな工夫をしているのだろう。」という問いかけよりも、「　　さんは、梨の木はどこを見て仕事をしているのだろう。」と問いかけることによって、子どもたちは具体的にポイントをしばって思考を深めることができる。また、学習問題に対して予想をさせることも、早く調べてはっきりさせたいという意欲を高めていく。

さらに、専門家の話を聞くことができる、身近な人への聞き取りができる、地図を作ったり、図や絵を書いたりする、意見交換によって話し合いを深めることができる、など多様な活動を取り入れることにより、追求意欲を喚起することができるのである。ただ、これらの活動が何を意図して行われるのかを明確にもっておかなければならない。

こうした意欲付けの工夫をしながら日々の実践を行うことで次にあげる基礎、基本の習得を図っていくのである。

#### 4 社会科における基礎・基本

社会科における基礎・基本となる力を次のようにとらえている。

- 社会的事象の中に問題を見つけることができる。(関心・意欲)
- 問題追求のために必要な資料等を見つけることができる。(資料収集)
- 資料等から問題解決のための事柄を読み取ることができる。(知識・理解)(思考)
- 読み取ったことがらを表現し、伝えることができる。(資料活用・表現)

これらの4つの力を単元を通して身につけていくことで、実践的行動力につながる社会的思考力判断力を身につけていけると考える。

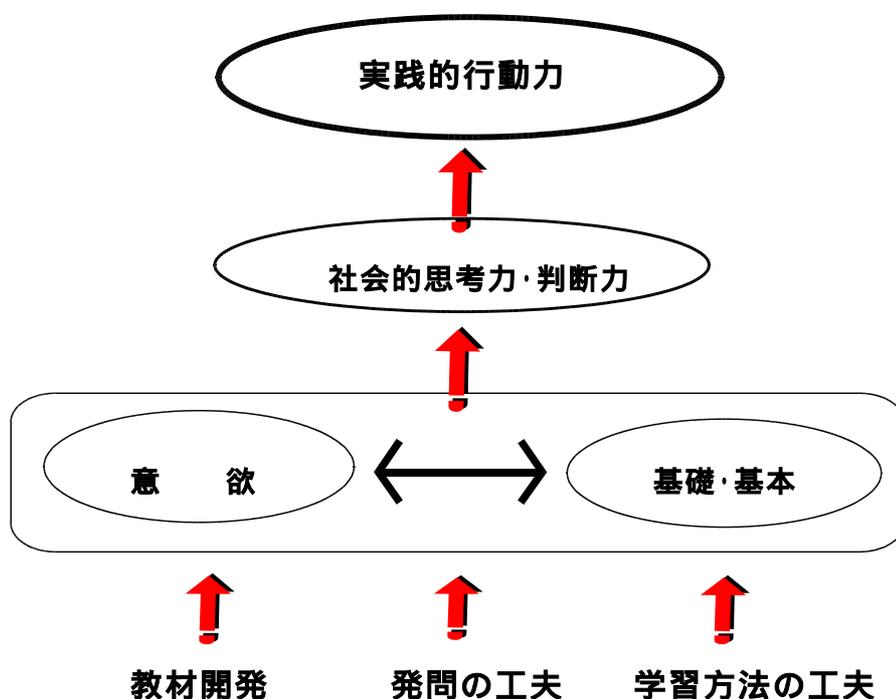
については、写真資料、統計資料等の中に問題が含まれているものを提示し、そこから問題に

自ら気づけるような実践を繰り返すことで、「なぜ...だろう、本当はどうなんだろう。」といった問題に自ら気づいたり、問題を発見したりすることができるような力が育つのではないかと考える。

については、問題解決のためにはどうしたらいいのか自分で統計資料などを探したり、聞き取りをしたり、どこかに出かけて観察をしたりといった方法を身につけることである。図書、各種パンフレット、統計年鑑等の資料、インターネットのホームページなどの例示をしていくことで、今求めている資料、情報はどうすれば手に入るのか考える力を育てるのである。さらに、何を調べるのか焦点化してから、資料収集ができる力もつけたいと考えている。

は、資料そのものから問題解決のための事柄を自分で読み取る力である。文章をていねいに読み取る力、複数の資料を比較する力、統計を読み取る力、地図資料を読み取る力、絵や写真、映像資料から見取る力などが具体的にあげられる。

は、資料等から読み取った事柄を問題解決のための資料に構成し直し、分かりやすく表現する力である。こうすることで論理的な思考力も身につけることができるのではないかと考える。



#### 4 授業を構成するアプローチ

これまで述べたような力や意欲を育むためには、どのような学習展開や工夫が必要であろうか。授業を構成する上で2つのアプローチが考えられる。1つは「活動」からのアプローチ、もう1つは「課題」からのアプローチである。(全体会発表参照)社会科では以下のように実践してきた。

##### 「活動」からのアプローチ

「活動」とは、発見的活動や創造的活動であり、展開することで学ぶ意欲が高められるものでなくてはならない。例えば3年生の「学校のまわり」の学習では、地域マップを作ることや航空写真から読み取る活動のことである。4年生では、「ごみの始末と利用」で、「生ごみは燃やすのがよいか、堆肥にするのがよいか」というテーマでディベートをする活動などである。これらの活動では、

教材固有の魅力や価値、系統性を教師が見極め、「教材と子ども」の関係をしっかりと考えなければならぬ。先述した「おもしろいから 自ら学ぶ意欲」はここで見取ることができるであろう。

#### 「課題」からのアプローチ

「課題」とは、どういうことを子どもと検討するのか、議論したいテーマのことである。例えば、3年生の「学校のまわり」では、「なぜ田んぼが多いのだろうか」、「この場所に工場が多いのはどうしてだろう」、5年生の「わたしたちの生活と食料生産」では、「なぜ地産地消が盛んに言われているのだろうか。」などである。教材を教師がどのように解釈し、子どもたちに身につけさせたい力は何かということを考え、発問を十分に吟味するのである。子どもたちが考え判断する一つの場となり、またその力を身につける場面であろう。

## 5 社会科における実践的行動力とは

「社会科における実践的な行動力」とは何か。これは社会的事象における思考力・判断力・自己表現力に他ならない。つまり、社会事象に対してある「価値判断をしていくこと」であり、ある政策に対して賛成なのか反対なのか、できるだけ客観的な資料やデータにもとづいて自分の価値判断をすることこそ実践的な行動力の基礎であると考えられる。どの方法や方策がいいのかを公正に判断する能力、それを育成することである。この力は、学習意欲と、基礎・基本となる力の上に成り立っている。さらに、実践的行動力が高まってくると、学習意欲も高まり、「もっと調べてみたい」、「世の中ではどんなふうにか考えられているのだろうか」、「友だちの意見も聞いてみたい」などという気持ちをもって学習に取り組んだり、また、そのために必要な基礎・基本となるような力を身につけたいという相互に関係しあっている力であると考えられる。小学校では、基礎・基本となる正しい社会認識の形成の方に重点を置き、構成した単元で思考力・判断力の育成を行っていく。中学校では、さらに思考力、判断力の育成に重点を移していくのである。

また、実際の日常で個人的に行ったり、学んだことをさらに継続させ、深めたり、家族や友人と意見を交わしたりできることも「実践的行動力」なのではないかと考える。例えば、環境問題について自分ができることを考え、実践したり、環境に対して見方が変わり、新たに何かに取り組もうとする意欲が育成されることで実践的行動力が高まってきたとしてもいいのではないかと考える。

#### 参考文献

- 桜井茂男 「教育展望」2003.9 教育出版  
「自ら学ぶ意欲のアセスメントと育て方」 2003  
北 俊夫 「社会科 学習問題づくりのアイデア」 2004.11 明治図書